

子どもを 自然災害から 守るための備え

特集にあたって

自然災害に備え子ども自身の力を高めるかかわりの重要性

近年、大規模な被害をもたらす自然災害が日本各地で発生しており、災害の種類も、地震、津波、豪雨、台風、竜巻、火山噴火、豪雪、寒冷および熱波など、多様となっています。日本全国どこで生活をしていても自然災害に備え、自分の安全や命を自分で守ることが重要であり、その力を養うことが求められています。災害は、準備期→災害発生→対応期(急性期・亜急性期)→回復期→復興期が連続しており、災害サイクルと呼ばれています。とくに、準備期は発生の可能性のある災害に備え、被害を最小とするために重要な時期といわれています。

私たちは、2011(平成23)年に発生した東日本大震災以前より自然災害の備えの重要性に着目し、とくに災害発生時に特別な配慮を必要とする障がいのある子どもを対象に研究を開始しました。これまでに、特別支援学校教職員、児童・生徒と保護者の協力を得て、特別支援学校などで活用可能な3つのツール開発を行ってきました。最初に開発したツールは、阪神淡路大震災の経験から開発された「小児病棟用ケアパッケージ」(研究代表者：片田範子氏)を参考にした、大人が子どもを守るためのシミュレーションを取り入れたツールです。その後、開発した2ツールは、障がいのある子ども自身が災害に備えセルフケア能力を高めることに着目したツールです。

これらのツール開発からみえてきたことは、医療を必要としている子どもや障がいのある子どもの災害の備え

に日ごろから看護者がかかわることの必要性です。災害発生時に子どもの命を守るには、看護者が子どもには自分の身を自分で守る力があることを信じ、緊急時に命を守る重要な薬の説明と日ごろの備えについて子ども本人にも指導すること、医療的ケアの必要物品の準備や緊急時の対応についてなどのかかわりを行うことが必要です。

本特集では、小児領域での災害にかかわる研究の概観、開発したツールの紹介と介入効果・課題、病院での災害の備えの現状と課題、およびツールを活用した特別支援学校での備えの現状と課題などについて報告します。災害への備えの研究を始めてから、「災害に備えることの重要性はわかっています。でも、具体的にどのようにしたらよいのかという方法論がわからないのです」と言われることがよくあります。災害に備えることは決して特別なことではなく、子どもの日々の生活の見直しを子どもと一緒にいき、子どもが自分の身を守るために必要なかかわりを行うことです。

本特集が、子どもたちの安全や命を守ることへの参考として皆さまのお役に立てることを願っています。

関西医科大学看護学部・看護学研究科教授
加藤令子 Kato Reiko